



Title	第一部 通史 . 第四編 キャンパスの変遷 . 第四章 札幌キャンパスの拡大 (札幌キャンパス第一期) 一九一八~一九五九年
Citation	北大百二十五年史, 通説編, 273-283
Issue Date	2003-12-25
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/28166">http://hdl.handle.net/2115/28166</a>
Type	bulletin (article)
File Information	4(4)_273.pdf



[Instructions for use](#)

## 第四章 札幌キャンパスの拡大

### (札幌キャンパス第一期) 一九一八～一九五九年

北海道帝国大学時代の建築について、これまで、工学部本館、理学部本館、農学部本館といった主要施設が単体で紹介されることはあったが、キャンパスの様相を一変させた医学部および附属医院の諸施設や、この時期の営繕活動を担った建築技術者（設計者および施工者）について、語られたことはなかった。事務局施設部には、一五〇〇葉を超える北海道帝国大学時代の建築設計図面が保管されている。これら図面の表題欄の捺印から、設計者をはじめとする設計組織の様子を知ることができ、事務局総務部人事課所蔵の履歴簿の記載内容と比較することにより設計体制も窺い知ることができる。一九一八年四月（大正七年度）から四一年三月（昭和一五年度）までの学部別建築工事価格、延床面積、および主な竣工建築の構造・階数および設計・施工者、営繕組織の変遷ならびに主な建築技術者を図4・3にまとめた。

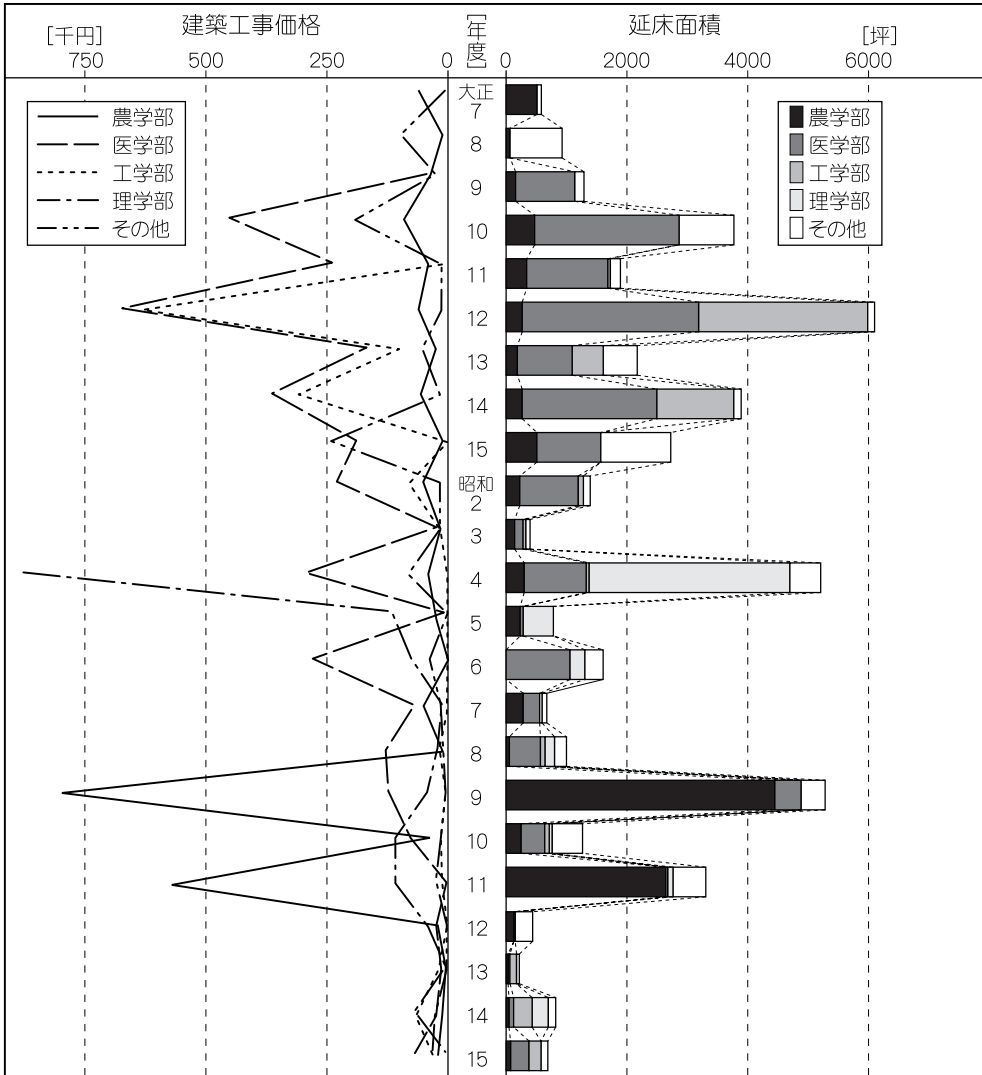
本章では、この時期のほぼ全期間に渡って建築工事が行なわれた医学部および附属医院を基軸に、主にファサードデザインおよび構造形式に着目しながら、キャンパスを彩る諸施設の変遷を営繕技術者との関連とともに見ていくことにしたい。

#### 第一節 スティックスタイルからセセッションへ 木造の時代

北海道帝国大学は一九一八年四月に医学部（設立当初は医科大学）を新設し発足することになるが、前年の一七

主な竣工建築 [学部名]建築名称(構造・階数/設計者/施工者)*	年度	組織名	課長・技師			主な営繕技術者		
			課長	技師	主任	■ 嘱託	■ 技手	□ 雇
北海道帝国大学創立 [農]育種実験室・特用作物温室(木1)[農]肥料効能実験室(木1)	大正7	建築事務所	俊栗山	浦五十吉	阿部千代吉	安積炭助	小原庄六	
医学部開学 予科(医学部)教室・学生控室(木1, 2) 寄宿舎南寮(木2)	8	建築事務所	田中豊太郎	田中與作	松田熊吉	安積炭助	清波正	
[医]解剖病理組織実習室・解剖学講義室(木1, 2) [医]解剖学法医学講義室(木2)[農]水産専門部化学実験室(木1)	9		久積	佐立志雄				
医学部附属医学院開業 予科(工学部)教室・化学実験室(木1, 2) [医]生理学薬理学医化学教室・講義室(木2)[医]医院本館(木2)	10	建築事務所	久積	佐立志雄				
[医]病理学細菌学衛生学教室(木2) [医]生理学薬理学医化学実習室(木2)	11		岡林晋松					
[医]本館(木2/新開)[医]臨床講義室(木2)[医]医院手術室(RC1)[医]眼科・第一内科・第一外科病室(木2/大星・伊藤)[工]本館(木2/大星)	12	営繕課	岡林晋松	宮野伯姓松本直矢	田中政勝	田中延雄		
工学部開学 [工]汽罐室並実験室(RC1) [医]耳鼻咽喉科病室(木2/阿部・太田/大星) 学生生徒控所(木2)	13		落藤藤吉					
[医]産婦人科・第二内科・第二外科病室(木2/太田・舛谷/大星)[医]医院事務所(木2/太田)[工]電気水力採鉱・化学・地質学実験室(RC1)	14	営繕課	落藤藤吉					
[医]皮膚泌尿器科・小児科病室(木2/太田・舛谷/大星) [農]実験室(RC3)	15		萩原悊正					
[医]婦人科手術室(木1+RC2)[医]精神科病室(RC1/舛谷/大星) [医]薬物化学実験室(RC2/小原)[農]昆虫学標本室(石1)	昭和2	営繕課	萩原悊正					
[医]伝染病室(RC2/太田/木田)[医]第一外科・第一内科研究室(RC2/太田/伊藤)[理]本館(RC3/萩原/大星) 土木専門部(木2/太田/伊藤)	3		落藤藤吉					
理学部開学 [医]第二内科・耳鼻咽喉科・眼科・第二外科・産婦人科研究室(RC2/木崎・太田/木田・大倉・伊藤・田中)[医]製剤室(RC2/岡田)[理]厚岸臨海実験所(RC3/岡田)	4	営繕課	落藤藤吉					
[医]皮膚泌尿器科研究室(RC2/十日市/東山) [医]外来応急診療所(木1/東山)	5		落藤藤吉					
[医]小児科伝染病室(RC1/槇) [医]小児科研究室(RC2/槇/伊藤)[医]精神科研究室(RC1/鴨下/大林)	6	営繕課	落藤藤吉					
[農]本館I期(RC4地下1/岡田/大倉) [医]理学的治療室(RC2/鴨下/木田)	7		落藤藤吉					
[医]登別分院研究治療所(RC2/槇/伊藤) 予科教室I期(RC3/佐々木/沖津) 常時低温研究室(RC2/東山)	8	営繕課	落藤藤吉					
[農]本館II期(RC4地下1/岡田/大倉) 正門(RC/木田) [理]室蘭海藻研究室(RC2/田中/伊藤)	9		落藤藤吉					
金属化学研究室(RC2/那須/大倉) 予科教室II期(RC3/宮野/東山)	10	営繕課	落藤藤吉					
[理]山下生化学研究室(RC2)	11		落藤藤吉					
	12	営繕課	落藤藤吉					
	13		落藤藤吉					
	14	営繕課	落藤藤吉					
	15		落藤藤吉					

\*[農]は農学部、[医]は医学部、[工]は工学部、[理]は理学部。構造のうち「木」は木造、「RC」は鉄筋コンクリート造。大正13年以降は設計図面表題欄に「設計」の捺印欄があり、そこに押された印の名字を記載している。施工者は「伊藤組組報」の記載による。新開は新開新太郎、大星は大星三松(讀平)、木田は木田組、大倉は大倉土木、伊藤は伊藤組、田中は田中組、東山は東山礦三、大林は大林組、石塚は石塚組、沖津は沖津組。



『北海道大学所属国有財産沿革』(1958年)より作成。農学部には植物園、附属農場、水産学科(学部)を含む。その他には、本部のほか、予科、寄宿舎および官舎、附属演習林(外地舎)を含んでいる。建築工事費には改築工事費を参入しているが、設備工事費および附属工作物は含まない。

図4-3 北海道帝国大学学部別営繕工事一覧

年九月には浦五十吉（一五年東京帝国大学建築学科卒業）が文部省より「札幌医科大学新設工事の設計」の囑託を受け、さらに同年十月には文部技師栗山俊一が農科大学建築事務所長として札幌に赴任し、医学部校舎の建設工事を開始していた。同年九月十一月に基礎工事が行なわれたが、この間の十月二十四日、東京の文部省において第一回医科大学創立委員会が開催された。メンバーには東京帝国大学医科大学教授八名のほか、農科大学学長佐藤昌介、文部省の建築課長柴垣鼎太郎などが参画していた。この会議において、予算に余裕がないため各施設は東京帝国大学のそれに準拠し木造とするが、床下に耐寒煉瓦を敷き、各教室は廻廊式とすることなどが決定された。この時の配置計画を「北海道帝国大学平面図」（附属図書館蔵、p.a.056）に見ることが出来る。現在の北一三条通りに該当する道路を境として南に基礎科、北に附属医院が位置し、基礎科では小ロータリーを持つ前庭を教室棟がU字形に取り囲み、その背後に実習室および実験室棟が配置され、北一三条通り中央には大ロータリーが設けられ、これを中心に附属医院本館が基礎科棟と対峙し、背後に各病棟が平行配置されるものであった。

基礎科の各校舎は、小ロータリーこそできなかったものの、ほぼこの計画案の通りに実現した（p.a.064）。廻廊式とした配置計画は理にかなっており、細菌学の中村豊教授は「この大学は各教室が非常によく連絡してゐる」と感想を述べている。各教室の外壁は、いずれも赤ペンキ塗りの下見板張で、腰から下を目打ち板付きの豎羽目板張、軒下および妻面を白漆喰塗りとしている。妻面破風上部は垂れ壁とし、持ち送りやバテン（batten：棧）をつけ、壁面の木骨構造を強調するデザインと共にスティックスタイルを装飾の基調としている（p.a.065,067）。なお、学生の入学に先駆けて前年に建築された寄宿舎（p.a.070）や予科は、増築ということもあり農科大学時代のデザインを踏襲している。

文部省の計画案通りに実施された基礎科に対し、附属医院は、建設にあたり、内科学の有馬英一をはじめとする臨床系の教授達から不満の声が沸きあがる（『フラネ』一九三二年十一月、「開学十週年記念特輯号」）。「昔私等が勤

務していた明治四十一年ころの東大病院と同型のもので」（有馬英二『わが七十七年之歩み』）、「病棟が平家で、各課病棟あたり二十五名ほどしか入院患者を収容できない、学生の臨床講義にも支障」（『医海時報』一九一九年四月十二日）をきたすという。「初めて之を見た時の私の驚きはどんなでしたらう。……之は全然設計変更して最新式の大病室を経て今後数十年吾が北海の天地が大いに開け人口が数百万増加するとともに障碍のないような永久的のものを造らなければならぬと決心」したと回想している。そこで鉄筋コンクリート造三階建ての高層建築を推奨したが、予算不足により不採用、配置計画についても馬蹄形平面を提案したが、まとまりがないということで廃案となった。最終的な実施案は各病棟の平行配置の名残はあるものの、医院本館は外来患者のアクセスを考慮して、基礎科ではなく西五丁目正面を向け、代わりに手術室が基礎科の前庭を囲むように建てられた。この配置計画は有馬の提案によるといわれ、ドイツのハンブルクの大学病院を参考にしたという。ハンブルク医科大学病院は一九一六年の建築であるので、当時最新の病院建築を模範としたことになる。他に、ハンブルクのバルンベック病院、ベルリンのウィルヒョウ・インステイトを模したとも言われる。特に後者は病棟の平面計画およびファサードデザインが類似している。また、有馬が偶々購入した本に病院の詳細な図面が掲載されており、各科病棟配置を営繕課長に薦めたという逸話も残っている。「病院の模範を全日本に示してやらう」と、有馬は外科学教授秦勉造と相談の上、病棟を全て共通の二五〇坪二階建てとし、各科教授がそれぞれの病棟の基本設計を行なうこととした。「北大の医院の全形は実際よく整うに心持ちの良いことに於いて全日本に類のないものでありまして、全く誇るに足るものであります」（『北大医学部五十年史』）と語られている。

医学部を二つに分断する北一三条通りは、病理学の今裕教授が、農学部の前川徳次郎助教授と石田助手に設計を依頼した。「ダブル・アレ（double allee）」と呼ばれる幅三六間の歩車分離道路は、この時に計画されたもので、現在銀杏並木となっている街路樹には、前川が提案したポプラではなく桜と紅葉が植えられた。

ところで、北海道帝国大学発足時の建築事務所長栗山俊一は一九一九年二月に職を辞し、代わりに同年六月、文部技師田中豊太郎が「工学部創設工事ノ設計及監督」を受けて赴任した。田中は三年十二月竣工の工学部本館（通称「白聖館」、p.a072～074）の設計者と言われており、「貧弱なる創立費予算を以って堂々たる本館を建築し、十一年十一月の開院までに間に合わしたるは田中技師の手腕の然らしむる所であつた」（前出『フラテ』）という文面から、医学部附属医院本館（p.a062）の設計も行なっていたことがわかる。栗山および田中が所長を務めた時代には、浦五十吉、田中與作、松田熊吉、佐立忠雄の四人がいずれも「医学部（医科大学）新設工事設計・督工」の囑託を受け、任期を重複することなく着任している。任用期間から判断すると、医学部基礎科各教室の実施設計および現場監督を担当したと考えられる。

一九二二年一月、建築事務所は宮繕課へと改

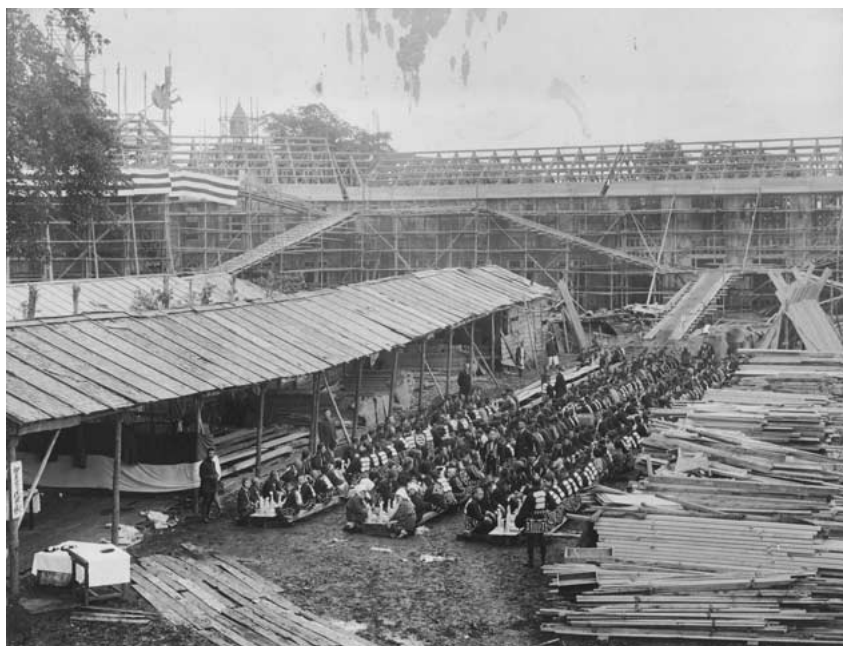


写真4-1 工学部本館上棟式  
（大星孝幸氏所蔵）

組する。田中は時を同じく所長職を辞したため、二三年五月に文部技師岡林音松が赴任するまで課長不在で、技手安積久助が課長心得の職にあつた。二三年四月（大正二二年度）以降は、図面の表題欄に「課長・主査・設計・浄写・校合」の捺印欄が設けられ、その押印より、設計担当者を知ることができる。木造時代の設計欄には太田延雄、舛谷乙治の二人の技手の他、阿部千代吉、小原庄六、横六郎、清波正の四人の雇の名前を見ることが出来る。

田中が所長に着任以降の各建築の意匠は、セセッションを基調とする。一九二二年九月三十日竣工の医院本館は、人造石張りとし造の車寄せにより外観を石造風に見せ、マンサード（腰折れ寄棟）屋根をかけている。正面中央の大振りな腰折れ破風部分を含め全体に垂直性が強く表現されている。二三年十二月六日竣工の工学部本館は、外壁を一面に白色のタイル張りとし、医院本館より更に幾何学的装飾と垂直性の強いデザインでまとめられている。附属医院の各病棟は、屋根には石綿スレートを葺き、フレアドルーフ（軒先が広がった屋根）の寄棟をかけ、外壁は人造石仕上げである。第一内科と第一外科、耳鼻咽喉科と第二外科、産婦人科と皮膚泌尿器科がそれぞれ同一の意匠となっている（p.a.075）。

## 第二節 キャンパスゴシックとインターナショナルスタイル

### 鉄筋コンクリート構造への転換

一九二三年九月一日の関東大震災の影響を受け、北海道帝国大学においても漸く二五年以降、鉄筋コンクリート構造が採用されるようになる。その過渡的なものが、医院事務所（p.a.076）で、構造的には木造ではあるが、正面中央車寄せ部分に巨大な柱型をデザインした鉄筋コンクリート然とした塔屋をたてる。同様のデザインモチーフを二六年竣工の農学部実験室（p.a.081）や、二七年竣工の医学部薬物学実験室（p.a.079）および衛生学教室にみるこ



とができる。これらは北海道帝国大学では初期の鉄筋コンクリート造であり、セクションの垂直性と幾何学模様を継承した過渡期のデザインと位置づけることができる。

一九二九年、その後の北海道大学の施設の方向性を決定付ける二つの鉄筋コンクリート造建築が竣工する。一つは理学部本館であり、いま一つは医学部附属医院伝染病室である。

理学部本館（p.086）は、一九二七年十一月に工事開始、二九年十一月に竣工した、当時の札幌でも数少ない大型の鉄筋コンクリート造建築である。外壁をスクラッチタイルやテラコッタで覆い、パラペット部分のロンバルド帯（小アーチ列）やバットレスに代表されるロマネスク様式に、尖頭アーチやリブヴォールトなどゴシック様式を加味したヨーロッパ中世風の堂々たる外観を呈する。階段室最上部のクロスヴォールト天井は、インシュタインドーム（p.084）の名で知られている。設計管理を担った萩原惇正は、北海道庁土木部建築課勤務中の二七年六月に北海道帝国大学より、新営工事二開スル設

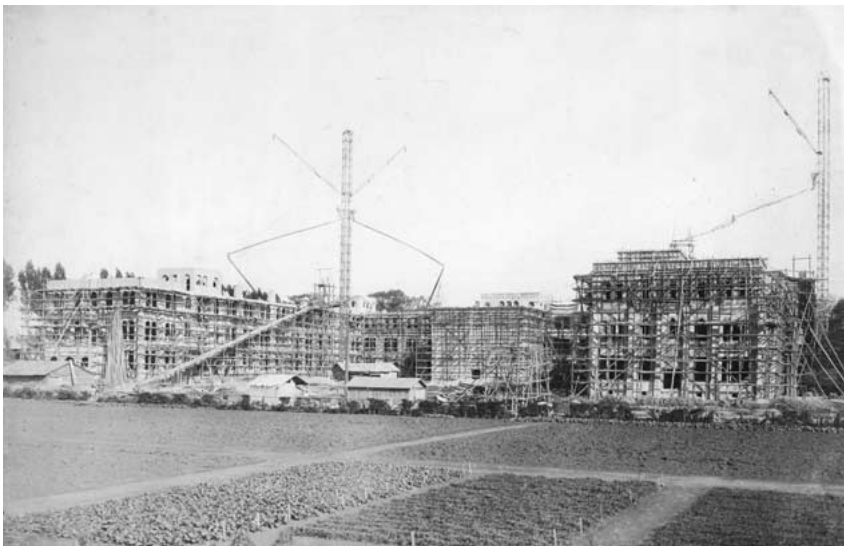


写真4-2 理学部本館コンクリート打揚式  
（大星孝幸氏所蔵）

計及監督」の囑託を受け、同年八月に北海道帝国大学技師、九月に営繕課長となった。請負は大正初期の営繕事業を手がけた大星三松である。これまで大星は理学部本館工事請負で、不慣れな鉄筋コンクリート工事のため、多額の負債を背負い廃業したとされてきた（『風雪の百年』）。しかし、大星は二七年に既に鉄筋コンクリート造の精神科病棟を施工している。加えて、理学部本館工事を非常に安く請け負ったことにより実際に赤字が出たが、翌年の理学部附属屋新営工事の請負で損失分は回収できたという。つまり、理学部工事は大星の廃業の原因ではない。実は、大星は息子の病死による跡継ぎの不在、世界恐慌の煽りなどで、理学部請負以前に既に廃業を考えていたという。大星の請負業としての成長は北大関連の工事請負に重なる。工学部本館、医学部附属医院の病棟の大半も大星が請け負った。総長佐藤昌介との深い親交が見え隠れする。廃業を決めていた大星であるが、同じく勇退を決めていた佐藤昌介に理学部建設を請われたのだろう。理学部本館という大輪の華を最後に咲かせ、佐藤は北大から、大星は請負業界から潔く身を引いたのである。

一方の伝染病室（p.a.087）は、当時の世界的な近代建築の規範となりつつあったインターナショナルスタイルを採用している。平滑な外壁、装飾のない矩形の窓、鉄とガラスとコンクリートでできた四角い箱状のスタイルである。病棟に増築された各科研究室もまた鉄筋コンクリート造で近代的外観を持つ。「各科に火災で焼ける心配のない研究室を造り、病歴、文献、標本其他を火災から守ろう」と眼科学の越智貞見教授が提案したことによる（『医学部五十年史』）。外壁は黄褐色の人造石またはスクラッチタイルで、病棟との調和を配慮している。病棟のように厳密な共通形態はとらないが、軒高ほぼ三〇尺の二階建てにペントハウスを突き出した外観は類似する。窓も棟毎にプロポーションを変えながらも、丸窓をアクセントとして用いることでデザイン上の連携を生んでいる。設計は図面捺印から技手太田延雄と雇木崎武作の名前を確認できるが、第二外科研究室（p.a.091）と耳鼻咽喉科研究室は教授自らによる設計という。また、一九三一年竣工の製剤室（p.a.089）は捺印によると岡田の設計であるが、薬局

長酒井隆吉が設計に大きく関与した。

ここまで新築を繰り返し返してきた営繕事業も、北八条キャンパスへの移転から三〇年が経過し、初期の木造校舎は老朽化が目立つようになった。一九三三年、まず農学部本館の改築工事が始まった。鉄筋コンクリート造四階建て地階付き、さらに中央に高層塔を設けている（p.a.098）。当初は装飾的な塔屋が予定されていた（p.a.099）。設計は理学部本館と同じく萩原惇正。ただし、図面捺印は、期ともに岡田鴻記である。スクラッチタイルやテラコッタ装飾に共通項はあるが、正面中央大時計周辺の捻り柱が目立つ程度で、華美な装飾は控えられている。三六年の陸軍特別大演習の際、農学部本館が大本営および行在所にあてられたことと無関係ではないであろう。同年八月の第二期工事後に予定されていた増築工事は財政難のため中止された。

一九三五年から三七年にかけて予科教室（p.a.097）も鉄筋コンクリート造へと建て替えられた。設計は萩原の後任として三四年五月に営繕課長に赴任した落藤藤吉。ただし、設計欄の捺印は、期が佐々木浩志、期が宮野直矢である。外壁をスクラッチタイルで覆っているが、農学部本館よりさらに装飾が抑制されている。

### 第三節 戦中・戦後のキャンパス

戦時体制への突入という社会背景が校舎の建築デザインにも影響を見せ始める。この傾向は、予科教室のデザインにすでに認められるところであるが、なかでも一九三五年十月竣工の常時低温研究室（p.a.103）、三十七年十二月竣工の金属化学研究室、三十九年十月竣工の山下生化学研究室（p.a.104）の三棟は、ほとんど装飾性のない簡素な外觀となっている。四一年十月竣工の低温科学研究所（p.a.105）では例外的に、農学部本館と類似したスクラッチタイルおよびテラコッタの捻り柱装飾を見ることができ、理学部本館に直面する立地条件から、より年代の近い農

学部本館のデザインモチーフを借り受け、対峙させることにしたのである。

戦争は建築デザインだけでなく、キャンパス自体にも影響を与えた。強力な統制の下、主食の配給も激減し、一九四一年頃より構内の空地に点々と野菜の栽培が始められ、これが次第に増加し、戦争末期の四四年八月十七日時点で、大学構内および植物園で合計一〇町四反六畝（約一〇・四ヘクタール）の耕作地があった（p.106）。この時耕地化されていない空地には防空壕が設けられていた（p.110）。四五年に入ると、札幌でも空襲警報が出されるようになり、延焼防止対策の一環で、工学部では校舎北側の芝生を剥ぎ取り、実験室屋上に敷き詰める偽装工作を行い、医学部では渡り廊下を取り外し、建物を迷彩塗装した。終戦を迎えても食糧事情は悪化する一方で、構内の耕作地はさらに増加し、四六年には約二〇ヘクタールにまで増加した。

終戦から二年後の一九四七年、北海道帝国大学は北海道大学と改称され、同時に法文学部が設置された。文系学部は五三年までに現在と同じ法・文・教育・経済の四学部となるが、校舎が新築されることはなく、旧予科建物を利用していた。そのため予科にかわってできた教養部もまた、新制大学移行に伴い廃止された専門部校舎、あるいは農学部改築工事の再開により空家となった旧農学部の木造校舎を利用したため、講義の分割運営を余儀なくされた。戦後までもなく新設された学部・学科のうち新規に校舎建築がなされたのは工学部建築工学科など一部に限られた。通称「建築棟」と呼ばれる工学部建築工学科棟は同学科建築学第五講座助教授木村徳國の設計により、一九五六年五月に竣工した。学内で初のカーテンウォール式鉄筋コンクリート構造であった。

キャンパス全体で、施設の老朽化、あるいは狭隘による更新・増築がさげばれる中、一九五四年以降、工学部建築工学科建築学第四講座助教授太田實の設計により、医学部附属病院（四九年に附属医院から改称）の更新が始まる。数十年先を見据え、「永久的」を目指して建築されたはずの「最新鋭」の病院施設は、老朽化の名のもとに、建築後わずか四〇年にも満たず、キャンパスから姿を消していくことになる。